

第4回流山市全市コミュニティ推進委員会会議録要旨

- 1 日 時 平成22年9月18日(土) 午後1時30分
- 2 場 所 流山市役所第2庁舎305会議室
- 3 出席委員 相川 征治 委員長、関谷 昇 委員
梅谷 秀治 委員、河村 栄夫 委員
染野 智司 委員、野路 烝一 委員
大塚 喜重 委員、倉田 繁夫 委員
- 4 欠席委員 狼 正久 副委員長、松村 友進 委員
- 5 事務局職員 兼子 潤一 コミュニティ課長
高橋 とし子 コミュニティ課長補佐
須郷 和彦 コミュニティ係長
- 6 協議事項 (1) 地域まちづくり協議会について
- 7 協議状況 開 会 午後 1時30分
閉 会 午後 3時38分

I. 地域まちづくり協議会シンポジウムについて

(1) シンポジウムについての事務局と全市コミュニティ推進委員会との見解

事務局

- ・ モデル地区を進めて、その後にシンポジウムをやり、徐々に広めていく。シンポジウムの前に煮詰めることがあるのではないか。
- ・ 地域まちづくり協議会の骨格、骨子等の議論を進めるとともに、地域まちづくり協議会の公募に向けた準備、具体的な公募案件等、公募の説明会のための準備を進めていただきたい。
- ・ 公募について、まちづくり協議会の運営についても、もっと煮詰めていただきたい。

全市コミュニティ推進委員会

- ・ 流山市として推進していくということで、まずはシンポジウムで狼煙をあげてやっていく。
- ・ 市長の意思表示、関谷先生の講義をもって、市民に対して発信していくことが必要だという合意形成を前回までに行った。
- ・ 委員会決定ということで市長と関谷委員の日程調整を依頼していた。
- ・ 日程がある程度定まっていないと、それに向けて内容的に固めていくことも難しい部分があるのではないか。
- ・ 将来的な運営について、補助金について等は、確かにこれから詰めていかななくてはならない。

関谷先生

今回のねじれと言いますか、こういう形になった一番のポイントは、モデル事業をどう位置付けるかという点で少しずれがあるのではないかという気はしています。私も最初にモデル事業の話聞いた時に、若干違和感を覚えたのは、モデル事業を公募でや

るというふうにしたところでは、これがちょっと引っ掛かりとしてあって、そこをどう捉えるのかという部分で、この委員会とトップの判断にずれが少しでてきているのかなという印象を持っています。

モデル事業をどう位置付けるかということで、一般的にはモデル事業というのは公募ではなくて、1つこれから市民に発信していくための形をつくる。特にこういう市民参加型の場合には、かなり初めての部分もあるので、事務局を始め、行政サイドからも手とり足とりでやりながら、とにかく1つの成功例をつくるというのがモデルというものの1つのやり方です。その成功例をもって、今度はいよいよ本格的に市民の皆さんにそれを発信して、説明をして、実際これから一緒にやってみましょう、それぞれの地域で検討してどんどん名乗りをあげていってくださいねというような流れが1つ有り得るシナリオですね。しかし、今回、モデル事業を公募でやるということで、公募というのは、多分一般的に思われている以上に大きな意味があると思っています。それは、市民に対して初めてまちづくり協議会というものを発信する機会になるわけですから、その発信の仕方をどのようにするかということはかなり慎重にならざるを得ないし、それ如何によっては市民の中で、場合によっては反発が起きるということもありますし、主体性をもって受け止めてもらえないということも予想されますから、そういう意味では、しっかりとした情報発信というものをして、説明も含めてやっていかななくてはならないということだと思っています。

この全市コミュニティ推進委員会で議論してきたことは、どちらかというとな後の方で、とにかくモデル事業を公募でやるわけだから、市民に対して幅広く発信をしていかななくてはならないという観点で議論をしてきた。そういう意味で、シンポジウムということも含めて、とにかく市の姿勢を示す。今回の地域まちづくり協議会とはどういうものなのかということ、各地区をまわって丁寧に説明をしていく、やりとりをしていくという1つのシナリオを想定したというところがあると思います。ただ、市の判断

としては、まず成功例というものをモデルでつくりたいという意向がおそらくあるということがわかっていますので、その辺で少しねじれがでてきてしまっているのかなというところが、客観的に見た時の1つの状況なのかと思います。その上で今後あらためてどういうふうにしていくのかということが求められると思うのですが、市としては2つの成功事例というものを早くつくりたいということがあるかと思いますので、あらためてそういう意向をこの委員会としてはどう考えるかということが、1つの議論すべきことであるかと思いますが、いずれにしても公募でやることになるのですから、発信の仕方、具体的にどういう順序で発信していくのかということ、今後のトータルシナリオとして、あらためて考えていく必要があると思います。その場合そのモデル的なものは、1つ進めていくのだけでも、モデルもそうですし、シンポジウムもそうですし、各方面に発信していくということ、どういう順序で、どういうウエイトでやっていくのかということ、あらためて確認していく。シンポジウム的なものも、モデル公募をする1つの狼煙をあげるという位置づけにするのか、それともモデルはモデルで進めるけれども、モデルだけではなくて、各方面いろいろな働きかけを、今後時間をかけて、今年から来年にかけてやっていくというその中の非常に重要な契機としてシンポジウムをあらためて位置づけなおすというふうにした方がよいのか、その辺は今後のトータルシナリオづくり如何によると思います。

建議を受けて市としては、まちづくり協議会を推進していくのだという判断はされて、それ以降の流れが出てきているわけですが、にわとりが先なのか、卵が先なのか的なことがあって、それをどう捉えていくのかということがあって、少し判断がそれぞれずれているのかなという印象です。つまり、市としては、このまちづくり協議会を小学校区単位で作っていくのだという大体の理念とか考え方については、ほぼ了解をしてそれで進めて行

こうというふうには判断されているとは思いますが、それぞれの小学校区単位の具体的文脈の中で、何をどういうふうにして、実際それがどういうふうに進んでいくのかという部分についてはまだまだ見えていない状態である。だから実際まちづくり協議会をつくるにしても、具体的に既存の団体がどうなって、誰がどういうリーダーシップをとって、どういう事業をやっていくということが具体的に見えていなければ、市としてこういうことになるのだということを、市長を通じて発信するということは難しいというのは、1つの実態なのだと思います。ですから、市長としても一般論は言えるかもしれないけれども具体的なことは言えない。具体的なことが言えない以上、そういうシンポジウムの場で話をすることによってやや躊躇するのかなという私の個人的な推測です。そういう部分も、もしかしたらあるのかもしれませんが。あくまでも市長が、このテーマについて一定の話をする場合には、具体性の部分が材料としては、ほしいということが、おそらくあるのかなと思います。そのために、今、モデルということをも早く進めて、実際にこういうふうに進んでいくのだということを、ある程度確認した上で、あらためて市長の口から堂々と市民全体に発信すると、そういうことが1つあると思います。

けれども、この委員会としては、まちづくり協議会を公募でやるということになっているので、だとするならば、とにかく幅広く、どんどん情報を発信していく。まちづくり協議会とはこういうものだということを、具体的に説明して発信していかなければいけない。モデルもその中に居続けて、本格的な動きをすぐにも、作りだしていきののだということを前提にして、前まで議論をしてきました。けれども、ここ数回の委員会の中で出てきているのは、それをこの推進委員会あるいは関係者が説明会を各地区でやっていくにしても、まずは市としての姿勢をしっかりと明らかにしておいてもらわなければ、われわれとしても説明するとしても限界がある。それだけでなく屋上屋を重ねるなどか、特定の役員の負担が増えるのではないかという批判は間違いなくでてくるでしょうから、そういったことを考えた時に、市長としてこう

いうことを謳っておいてもらわないと、各方面の説得が難しいのではないかということもあったと思うのです。だからそういう意味でまずは市長の抱負から宣言をしてもらおうということをしてもらわないと、先に進まないのではないかということなのです。だから、市長としては、市としてはということもあるでしょうし、こちらとしても、そういうところもあるということで、まさににわとりが先か卵が先かということになります。双方の言い分があるので、ここはどこかで確保する必要があるのかなと思います。ですから、委員会で議論してきたことを尊重するのなら、多少具体性が見えていなくても、こういう方針でいくのだということをして市長に語っていただくということを早めに組み込むということになるでしょうし、あるいは市が具体性というものを待ってからということであるのだったら、モデルの位置づけをもう少し検討した上でストーリーを考える、シナリオを考えるということになるとと思いますので、とにかく、今はかみ合っていないと思います。そこはどう判断するか。

モデル地区をとにかく先に進めるということです。

モデル地区を進めて、その後にシンポジウムをやって徐々に広めていく方がよいのか、それともまずはシンポジウムで狼煙をあげてやっていった方がよいのかということなのです。

【まとめ】

- ・ モデル協議会公募の条件（8月28日付け狼委員資料2枚目（3））、核となる団体、グループについて、公募からの選定の条件（3～4候補が出た場合、候補が全く出なかった場合等）などについてはこれからももっと詰めなくてはならない。
- ・ 地域まちづくり協議会の最終目標についても、8月11日付け狼委員資料の（2）の立場をとり、成功事例とは何か、今後の1年間の進め方を議論し、なぜシンポジウムが先に必要

なのかを議論してきたことなので、市長及び関谷先生の日程調整を事務局に引き続きお願いする。

(2) シンポジウムについて

① 合意した資料に基づいたシンポジウム構成

10分	市長あいさつ
60分	関谷先生講演
30分	佐倉市事例紹介
20分	流山市の構想紹介

A) 佐倉市の事例については関谷先生の講演の中にいれてもよいのではないか。

- ・ 関谷先生には基調講演としていただいて、地区社協との関連が流山ではキーとなるので、佐倉市の方から直接苦労したことなどをお話しいただくのはよいのではないか。
- ・ 今の段階で佐倉市の方がお話くださっても、流山は流山だといわれてしまうリスクがあるので、関谷先生からよい例としてお話いただくほうがよい。今後まちづくり協議会についてある程度進んだ中で成功事例として、佐倉の方から体験談をいただくというほうが効果があるのではないか。

関谷先生

私はどちらもあり得るかなと思います。先ほどの議論もそうですが、市としては、やはり反発を恐れている部分はあると思うのです。それは、一応具体性というのがありますけれども、市長が言ってしまうと、その批判というのは全部市長のところへ行ってしまうから、それはどうかという問題は市長の側とすればあるでしょう。だから、今回シンポジウムをやるにせよやらないにせよ、市民から出てくる批判というの

を誰がどういうふうを受け止めていくのかということをも
う少し考えた方がよいと思います。このシンポジウムをやる
時でも、その批判は市長が全部受ければよいというのでは、
それはやはり少し違う。推進委員のわれわれもその批判を
堂々と受けて話をしていくのだという形でシンポジウムだ
ったらシンポジウムをきちんと構成しないと、進めるだけ進
めて、批判は全部市長のところへとなったら、また少しずれ
ていってしまうから、そこをうまく演出する必要はあるかな
と思います。そして、その中で、佐倉が先進例かどうかは別
としても、1つの例として、先例としてその当事者の方に来
ていただいた方が反発を解きほぐすということにつながる
のであれば、呼ぶことは良いと思うし、逆効果であるとい
うのであれば、私の方で、佐倉もそうですし、日本全国の小学
校区単位の先進例というのはいくつかわかりますので、そう
いう例も含めて少し紹介するにとどめておいた方が良いと
いうのであれば、そこはそれで良いと思います。私はどちら
でもよいと思っています。ポイントは、そういう反発は必須
だと思いますので、それをどう和らげながら、これを進めて
いくという雰囲気を作り出せるかどうか、そこが大事だと思
います。

全市コミュニティ推進委員会については、もっと前面に出
てきたほうがよいと思います。

B) 佐倉市のよい事例があるならばどんなものかお聞かせ願
いたい。

関谷先生

基本的には、地縁組織を中心としたこれまでのコミュニ
ティ運営は、それ以外の受け入れなくてはならないことが
出てきている中で、やや縦割り感が強くなってきていると
いうところで、基本的には小学校区単位で地域の対応の主
体というものを横に結び付けていくという制度設計のもと

に地域まちづくり協議会というものが条例上定められているということが前提です。あとはその中で、その地区によって、ファシリテーター的な役の違いがありますので、1番最初にモデル地区としてやった臼井地区という、その宇田川さんという方が中心になってやったという地区は、まず協議会を立ち上げるということで、社協を中心としたいいろいろな関係者を集めて、準備会というものを発足させて、とにかく横のつながりをつけていこう、自治会は自治会としてやれることはあるけれど、できないことは社協と連携する、NPOと連携するというふうに、そういうことを課題ごとに議論を整理していったって、どこが中心にやれることが望ましいのかということはかなり細かく議論していったという経緯があります。ですから、具体的には、10近くの事業をやって、とにかくイメージとしては、まちづくり協議会として、こういう事業を1年間、年度ごとに計画を立ててやっていきたいと思いますという形です。それは、地域の防犯パトロールというものを、自治会と有志が連携するような形でやっていくとか、あるいは子どもたちの交通安全教室を警察と連携しながらやるとか、あるいは、地域でフリーマーケットなど、そういうものをNPO中心にやるとか、そんなアイデアを出し合いながら、事業計画というものを立てていったって、それぞれの事業ごとに連携をはかりながら進めていったということが基本的な流れです。細かく言い始めるといろいろありますが、イメージ的にはそういうイメージです。

佐倉の場合は、地域まちづくり協議会とはいっても、あまり最初から組織、組織というふうにはしないようにということで議論はしていたのです。こういう話をすると、組織としては地縁組織があり、社会福祉協議会もあり、他のものもあるとなると、また組織となると屋上屋を重ねる組

織なのか、そうするとまたどこからどういう人を協議会に派遣するのか、抛出すればよいのかということになりかねない。だいたいこういう組織の話をするとういう話になってしまう。だからそういう組織というのではなくて、結果的には組織としてはこうなっているという説明にはなるでしょう。けれども、実際のところは組織という話よりも、小学校区単位のまちづくり協議会というものをとりあえずつくるということは、組織というよりもそれを1つの単位として、こういったことができる、こういったこともできるという、どちらかというと事業ベースなのです。それで事業でこういうこともできる、こういうこともできるのだという形で話を進めていく。組織となると結局は負担の問題にしかたならないので、批判という話になってしまうのです。だから、そうではなく、既存の組織とは違った観点、あるいは違ったモチベーションで、こういったこともできるのだという、そういうやれることにするということを前面に出していく。場合によっては社協にまる投げの部分もあるし、そうではないところはそれぞれの県でできないところを各市やってきた部分もある。そこはケースバイケースのこともあるので一概に、きれいに論理立てては言えないくらい、いろいろなそれぞれのやりとりへと続くこともあるのです。提起的には組織性をあまり前面に出してはいないということです。

※佐倉市の事例については、佐倉市臼井のまちづくり協議会が定期的に発信している情報誌「ふるさと通信」を取り寄せて内容をみてることを関谷先生から勧められた。

問い合わせ先：佐倉市自治人権推進課

Ⅱ．次回日程と課題について

次回開催予定：平成23年10月2日14時より

委員会になるか勉強会になるかは事務局決定に
委ねる。

次回課題

- ・ 事務局は可能な限り早くシンポジウムの日程調整をする。
- ・ シンポジウムに向けての準備をする。
- ・ シンポジウムの内容について決定する。
- ・ 佐倉市の事例については資料を取り寄せ、佐倉の宇田川氏
にお願いするかどうかも含め、検討事項とする。

※シンポジウム前に市長と事前打ち合わせをするのは当然で
あるから、事務局が懸念している公募について、モデル地
区選定基準等について等、市長が安心して話せるようなも
のを委員会の総意として渡さなくてはならない。したが
いこのことについても議論はしていくが、次回はシンポジウ
ムの中身について優先的に議論する。

(1 5 時 3 8 分 閉会)